



主日礼拝説教 — 2016年5月1日

そして、新しい関係が始まる

聖書 ヨハネによる福音書 2章1～11節
マタイによる福音書 8章28～34節

武田 真治

1、福音書の書き始め方

ヨハネ福音書は、他の三つの福音書とはずいぶん違っていると思われているのですが、イエス様のご生涯を記していく形式や順番ではマタイやマルコと似ています。特に最初の部分はむしろヨハネはマタイやマルコに倣^{なら}っていると言い得るほどです。

それは、最初に洗礼者ヨハネが登場してイエス様を紹介し、イエス様が伝道の第一声を語り、弟子たちが選任され、実際の活動や奇跡行為が記されるという形式です。当時、誰か偉人を紹介する際にそのような書き方や形式があったのかもしれませんが。

ただ、その内容は他の福音書と大きく異なっています。イエス様の伝道の第一声もマタイやマルコは「悔い改めよ、神の国は近づいた」ですが、ヨハネの場合は「何を求めているのか」です。これはイエス様からの問い掛けとして、何より私たち一人一人に迫っている言葉だとヨハネが感じていたからでしょう。そして、ヨハネ自身が最初に耳にしたイエス様の言葉であったとも言い得るのです。同時に、この福音書を読もうとしている読者に対して「あなたはイエス様に何を求めているのですか」あるいは「あなたは自分の人生で何を求めて生きているのですか」と問い掛ける意味も持たされている重要な言葉なのです。その意味で今の私たち一人一人にも問われている言葉です。あなたは今、何を求めながら日々を生きているのですか、イエス様に、信仰に、教会に、何を求めていますか。この福音書を読みながら、私たち自身が自らに問うて行くべきことだと思います。

また、実際にイエス様が最初に為された活動や奇跡行為として記録されている出来事も他の福音書とは異なっています。マタイもマルコも「イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、民衆のありとあらゆる病気や患いをいやされた」であり、その結果「イエスの評判が広まり」「人々は四方からイエスのところに集まって来た」のでした。言わば、この世的に華々しいデビューを飾ったと伝えています。しかし、ヨハネがイエス様の最初の活動として記しているのは、先ほど読んで頂いた「カナの婚礼での奇跡」なのです。

それは、イエス様と弟子たちがカナという町で催された結婚式に出席したところ、ぶどう酒がなくなり、母マリアからお願いされ、水をぶどう酒に変えて人々に施されたという出来事でした。確かに、水をぶどう酒に変えるという奇跡行為ではありますが、人々がそのことで驚いてイエス様を褒めたとか、我も我もとイエス様の元に殺到したということはなく、ごく身近にいた人達しか気付かなかった奇跡でした。この点で他の福音書と大きく異なっています。もっと他の多くのイエス様が為された、人々を驚かせる奇跡があったのに、どうしてこのささやかな奇跡が最初のイエス様の奇跡として記されたのでしょうか？





2、ささやかな奇跡にこそ

いくつかの理由が考えられています。

その理由の一つは、最後の十一節に「イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された」とあることから、ヨハネが知っていた本当に最初の奇跡であったからではないかと。

確かにここにはイエス様の母マリアが登場しており、まだイエス様と一緒に生活していた時の話ということが分かります。公の伝道を開始される前の出来事でした。むしろ、この奇跡を口火として公の伝道を始められたと言い得ます。その意味で重要であったのだと。なるほどと思います。

そうであるなら、一方でここには他の弟子たちも居ましたから、マタイやマルコもこの最初の奇跡を知っていたことは十分に考えられます。しかし、彼らはその福音書にこの奇跡を記していません。それほど重要だとは思わなかったからでしょう。しかし、ヨハネは敢えてこのささやかな奇跡を大事だと思い、記録したのです。そこにある思いとは何でしょうか。

そこで更に考えられることは、奇跡そのものへの問い直しがここで為されているのではないかということです。つまり、奇跡とは人々の注目を引きつけ、驚かせ、賞賛を得るために行われるものだろうか、そもそもイエス様はそんなことの為に奇跡を為されたのだろうかという問い直しです。

《奇跡》とは、誰もが驚き目を見張るものだけではなく、実はささやかな日常の出来事の中に人知れず起こっていることでもあるのではないかと。イエス様はささやかな日常の出来事にも関わってくださり、私たちに助けるために、奇跡を起こして下さると。他の人はそれを認めないで不思議な偶然と言うかもしれないけれど、身近にいた者たちは奇跡が起こっていると分かるものではないかと、ヨハネは示したかったのではないのでしょうか。考えてみれば、気が付かないで暮らしているだけで、私たちの日常には神様が起こして下さった奇跡があふれています。むしろ、こうして生きていること自体が奇跡と言い得るのではないのでしょうか。それをささやかだと言ってしまう所に慣れや緩み、傲慢さがあるように思えます。そうではないのでしょうか。

3、イエス様と母マリアの関係

もうひとつ、この出来事が記録された理由に、ここでイエス様と母マリアとが会話を交わしているからということもあります。

ぶどう酒が足りなくなった時、真っ先に母マリアがイエス様に「ぶどう酒がなくなりました」と告げていますが、だからどうして欲しいかは語っていません。ある解説者によれば、イエス様は式に招かれていたけれども弟子たちまで来るとは想定されていなかったのではないかと、その結果、お酒が足りなくなったと。故に、師であるイエス様がなんとかすべきだと考えた。

それに対して答えられたイエス様の言葉が「婦人よ、わたしとどんなかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません」でした。随分、冷たい言葉ではないのでしょうか？ 何よりお





母さんに対して「婦人よ」はないだろうと思ってしまいます。どうしてこのような返事をイエス様は敢えて為されたのでしょうか。

それは、いよいよイエス様が伝道を開始される時だったからだと言い得ます。いわば出家、献身の時であったからです。これからは母と子との関係ではなくなりますよ、という宣言であったと。まさに母マリアへの決別の言葉であったのでした。そのことは「わたしの時はまだ来ていません」という言葉にもよく表れています。

「わたしの時」とは、今日読んで頂いたもう一つの箇所からも分かりますように《イエス様の十字架と復活の時》を指します。その時が来るまでは、私とあなたは関わりを持たなくなる。言い換えれば、十字架と復活を越えた時に私とあなたとは《新しい関係＝師と弟子》に変わるから、その時までには「かわりがなくなる」ことになりますよという宣言なのでした。

おそらくこの時、マリアはこのイエス様の言葉の意味が分からなかったでしょう。でも、主の十字架を目の当たりにした時、前もってこのように冷たい言葉をおられたのは、母親として子供の悲惨な死を見るショックを和らげようとされていた、敢えてこの時点で突き放すように言っておられたのだ、ということが後から分かったことでしょう。この言葉が、イエス様を我が子ではなく、信仰する対象へと転換していく大きな契機になっていったのではないかと思います。実際に、イエス様が復活された後には、マリアさんは主の忠実な信仰者として生きたのでした！

4、しいて願う信仰を

最後に今日の箇所です。とても面白いと思うのは、そのように突き放すような言葉を言われてしまったマリアが、しかしそれにめげることなく「母は召し使いたちに『この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください』と言った。」という点です。あくまでイエス様ならなんとかしてくれると信頼しているのです。これは母だから息子だからではなく、イエス様は人が困っている状態を見過ごしには出来ない方だと知っているからでしょう。ここに既にイエス様が救い主であるという信仰があると思うのは私だけでしょうか。そしてその期待にイエス様も応えられて、水をぶどう酒に変える奇跡を起こして行かれるのです。

私は思います、私共の願いや祈りはイエス様から見れば、なんと欲深いことだと思われるだろうと。そして「お前にはたくさんの恵みと祝福を与えているではないか」「そのことは私とどんなかわりがあるのか」と言われても仕方がないだろうと。そもそも私たちが祈ること自体、まだ恵みが足りないと言っているようなものです。でも、分かっているもお祈り、お願いし期待するのが私たちではないでしょうか。そしてきっとそのわがままな祈りにも耳を傾けて下さり、奇跡を起こして下さるのがイエス様です。「求めよ。そうすれば与えられる」と約束して下さっている通りに！

だからこそ一方で、「何を求めているのか？」というイエス様の声を常に意識して生きる必要もあるのではないのでしょうか。

(主日礼拝説教より抜粋)

